

1 986年公開の山田洋次監督作品『キネマの天地』は、昭和8年から9年にかけての松竹蒲田撮影所を舞台にした映画人の群像劇である。映画のメインストリーは、映画館の売り子から大部屋女優にスカウトされ、やがて主演に抜擢される少女の物語だ。

山田監督は作品のなかで、有森也実演じる少女が渥美清演じる父親と二人で暮らす長屋のシーンを幾度となく描いている。

長屋の中央には共同の井戸があり、母親たちは洗濯や水汲みがてら井戸端会議に花を咲かせる。子どもたちは井戸から目の届く路地や広場で遊んでいる。長屋に住む誰もが知り合いで、何くれとなく世話を焼き、気にかけて、声をかけ合う濃密なつながりがある。

山田監督は『男はつらいよ』など他の作品でも長屋的つながりに触れる。ただ、濃密さゆえの「おせっかい」や「遠慮のない厚かましさ」を描くことも忘れない。こうしたやつかいかいさも含めて、長屋

## 子育てする母親に優しい街 東京・ハートアイランド新田(2004年◆平成16年)

変わる日本の「暮らし」と「まち」



新田匡史

につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata

的つながりを理想のコミュニティと捉えているようだ。

### ◆失われた昭和の長屋的つながり

高度経済成長と歩調を合わせるように、昭和初期の長屋的つながりは徐々に失われていく。だが1970年代ぐらいまでは、その片鱗はとどめられていた。

急速に増え続ける団地でも、少なくなつたとはいえ井戸端会議が開かれ、醤油や米といった食材の貸し借りが行われた。子育てに悩む若い母親におせっかいなベテラン主婦が知恵を授けるなど、同世代だけでなく異世代とのつながりも残っていた。深まる関係に一喜一憂しながら、若い母親は母親として成長していったものだ。

団地に住む子どもたちは、近所の「縦の関係」で遊んでいた。そこには、6年生を筆頭に幼稚園児までが含まれる。子ども時代団地に住んだ40代以上の読者は、そんな経験をしたのではないか。ずっと団地住まいの私も、大きいお

兄ちゃんの背中を必死に追いかけた記憶が鮮明に残っている。

当時は年長の子どもの小さな子どもの面倒を見るのが当たり前だった。小さな子どもの母親は、近所のお兄ちゃんやお姉ちゃんに安心してわが子を預けられた。

乳児を育てる母親にも隣近所から救いの手が差し伸べられた。わが子を心から愛おしいと感じていても、毎日二人だけの閉鎖的な空間に置かれれば息が詰まる。母親にはそんな息苦しさから一時でも解放される時間が必要だ。日ごろから信頼できるつながりがあるからこそ、母親は安心して乳飲み子を近所に預けられた。

そして現代。周囲とつながりが持てない若い母親が子育てに苦しんでいる。助けが欲しくても、誰にも「助けて」と言えずに孤立している。とはいえ、昔ながらの長屋的つながりは荷が重い。おせっかいなベテラン主婦の助言は、やはり煩わしいと感じている。一方で、助けたいと感じている

性が向上した。

10年の四番街完成の直前には足立区とUR都市機構が子育て支援で連携。区の要請をもとに、一番街の集会所を転用し学童保育室を設置した。区の認定を受けた家庭福祉員(保育ママ)による未就園児のグループ保育が、四番街の住宅を活用して行われている。さらに、親子交流や情報交換の場としてキッズルームも開設された。

キッズルームの運営を委託されているのは、NPO法人ぶらちなくらぶ。主な活動は平日午前10時から午後4時まで開放された親子サロン、周辺幼稚園と連携しバス通園の子どもを早朝と夜間預かる幼稚園送迎ステーションだ。理事長の大竹恵美子氏はこう語る。

「街の親子が交流する場である親子サロンには、子育てに悩み孤立する一方で、プライベートの付き合いに踏み込めない若い母親たちに、共感者や新たなコミュニティをつくるきっかけを提供する役割があると考えています」

ベテラン主婦も、若い母親に対する遠慮がある。その人のためを思っただけの助言や注意が、叱責と捉えられて二度と近寄って来なくなるからだ。若い母親もベテラン主婦も、人づき合いに対してデリケートになっている。孤立する子育て中の若い母親は、ますます孤立感を深めている。

### ◆「平成の井戸端会議」の復活

こうした時代背景のなか、東京

荒川の河川敷や公園等の自然環境に加え、子育て支援が充実する新田



都足立区新田に約2800戸の大規模団地を建設する計画が持ち上がった。場所は隅田川と荒川に囲まれた中州にあるトーアスチール東京製造所跡地である。

それまで人が住んでいなかった工場跡地に新たな大規模団地を新築すれば、多数の人が新たに流入する。UR都市機構では小さな子どもがいる若い世帯、あるいはこれから子どもが増える子育て世帯が多くなると予測。出来上がった街に後付けするのではなく、計画段階から子育て世代を支援する街づくりを念頭に置いた。

2004年、ハートアイランド新田一番街の入居が始まる。それ以後、街には子育て支援に関連する施設が次々に開設された。認可保育園、区立小中一貫校、小児科や歯科などの入るクリニックモール、広大な芝生を備えた公園。街には民間の賃貸住宅や分譲住宅も建設されたため、増え続ける子育て世代の利便

親子サロンは母親たちの好評を得て、現在では延べ人数で約700人が利用している。この数字は利用する際に記名した親子を計上しているにすぎず、実際には倍近い数の利用者がいるという。

利用者からは「同じダンスをするにしても、みんなで遊ぶと楽しい」という声がある。親子サロンを利用することで、母親は子育ての悩みを分かち合い、息苦しさから解放されるのではないかと。もちろん、孤立が解消されるといふことは、母親どうしの関係が深まることを意味する。

「少し煩わしいこともあるかもしれないですが、他人のおせっかいは触れてみるのもいいのでは」

そう大竹氏は話す。ハートアイランド新田では、昭和の井戸端会議に似たつながりが生まれつつあるかもしれない。

街に、ルネッサンス



[企画制作] 新潮社